

第三百三十四話 政軍関係の三類型！

大木毅著「勝敗の構造 第二次大戦を決した用兵思想の激突」（祥伝社令和6年2月刊）を読んでいて、ハッと気付いたことがある。同書で取り上げているのは殆ど欧州戦線である。その中で、独の政軍関係、本メモランダムで取り上げた大東亜戦争間における日本の政軍関係、そして小生がリデルハート著「第二次世界大戦」で理解している英国の政軍関係の違いに気づかされたのだ。

大雑把に言えば、独裁的政治家の過度な軍の運用への介入タイプと日本のように政治が弱体で軍の運用に関しても云えぬタイプの両極端があり、その中間に合理的な関係性があるようだ。



1 アドルフ・ヒットラーの過度な軍事の介入

バルバロッサ作戦（1941/6～12）では、ヒットラーは、国防軍の専門的な意見を無視し、独自の戦略的決定を下した。南部ロシアの資源地帯を重視するヒットラーに対し、国防軍特に陸軍総司令部（OKH）は首都モスクワを攻略するが肝要であると主張していた。また、スターリングラードの戦いでもスターリンの名を冠した都市奪取に固執した。連合軍のノルマンディー上陸作戦においては反撃遅れが指摘され、バルジの戦いでも現実的でない目標設定をするなど、屢発出された独断的な「総統指令」は軍事専門家の意見を無視したもので、戦況に悪影響を及ぼした。

枚挙に暇ないほどの、国防軍首脳の見解具申を無視しての、ヒットラーの過度・過剰・無用な介入は、最終的にドイツ軍の敗北を招く一因となり、第二次世界大戦の結末に大きな影響を与えたと言えよう。

国防軍首脳は唯々諾々とヒットラーに屈服したのか？ 誇り高き独国防軍の矜持は何処にいったのか？ それともヒットラーを悪者に仕立てるための方便か？

イタリアのムッソリーニも同様の誤りを犯したし、スターリンも同じような過ちを犯している。独裁者の陥りやすい陥穽だ。

2 英国のチャーチルとアラン・ブルック陸軍参謀総長

英陸軍参謀総長であったアラン・ブルックは、戦時中に英首相ウィンストン・チャーチルと頻りに会合を持っていた。戦略的な意見交換を行い、時には激しい議論が交わされたと云う。チャーチルは、海軍大臣としての経験もあり、圧倒的なリーダーシップを発揮したが、アラン・ブルックも自身の専門的な見解をしっかりと主張した。両者には互いに対する尊敬と信頼があったと言える。斯かる関係性こそあるべき姿だろう。

3 日本の政軍関係については、本メモランダムでも幾つか書いたとおりである。

ヒットラータイプではなく、かといってチャーチルとアラン・ブルックタイプでもない。分立・軍事優先・機能不全のタイプと云ったら言い過ぎか。

4 若干の私見

- ・ 日清・日露戦時の政軍関係は軍事を知る政治指導者と軍事指導者の良好な人間関係や信頼関係を基礎にスムーズだったが、政治と軍事が分化するにつれその連携が乱れた。
- ・ 軍事責任者は、専門家として軍事的合理性の観点からの献策を率直かつ真摯に政治指導者に具申すべきであり、政治指導者は、それをも十分に踏まえて、外交、政治、世論、経済等のあらゆる要因を総合的に俯瞰して、大所高所から大戦略を決断すべきだ。軍事指導者は、一旦政治指導者が決断したことに関してはその実行を期すべきだ。
- ・ お互いの役割を認識しつつも、率直かつ真剣な論議が両者の間にあるべきであり、意見を異にする場合は徹底的に論議を尽くすべきだ。
- ・ 国家のトップリーダーを如何に養成するかが、問われよう。大宰相、出でよ！

（了）